

原 著

## 看護学臨地実習指導者の自己教育力の構成因子の検討

### Factors Involved in Self-Directed Learning for Clinical Nursing Instructors

千葉今日子, 富田幸江, 横山ひろみ, 中澤沙織

Kyoko Chiba, Sachie Tomita, Hiromi Yokoyama, Saori Nakazawa

キーワード：自己教育力, 臨地実習指導者

Key words : Self-directed learning, Clinical Nursing Instructors

#### Abstract

【Purpose】 This study aimed to identify factors involved when developing a self-directed learning scale for clinical nursing instructors.

【Methods】 Self-rating questionnaires were mailed to 1032 clinical nursing instructors in hospitals with at least 300 beds in the Kanto-Koshinetsu, and Tokai regions, and completed questionnaires were collected by a “leaving method” . The survey was conducted from January to March of 2018.

【Results】 We collected 811 responses (78.6%) , and analyzed 499 after excluding responses with missing values and from nursing instructors who occupied higher administrative positions. The means of the age of the nursing instructors was 37.9 + 7.2 years, for the length of clinical experience 15.0 + 6.5 years, for the employment in instruction 5.8 + 5.0 years, and for providing instruction after being trained as instructors 3.8 + 4.3 years.

We analyzed the 36 question items of the draft scale created based on an analysis of previous studies. As a result, 22 items were selected and the Kaiser- Meyer-Olkin measure of sampling adequacy was 0.91. After performing an explanatory factor analysis, 4 factors with 16 items ( $r > 0.4$ ) were extracted. The cumulative proportion was 57.4%. The correlation coefficient with the self-educational ability scale (Nishimura et al., 1995) was 0.48, and the reliability coefficient Cronbach  $\alpha$  was 0.91. (Nishimura et al., 1995) .

We named the four factors as: 1st “Inquisitive attitude towards nursing” , 2nd “Sense of responsibility to achieve practical goals” , 3rd “Utilization of interactions with others” , and 4th “Efforts to improve instruction skills” .

【Discussion】 We chose 16 items represented in 4 factors, and believe that the validity and reliability of the scale was on the whole excellent because each factor reflects the results of previous studies.

---

受付日：2018年9月30日 受理日：2019年1月22日

埼玉医科大学保健医療学部看護学科

## 要 旨

【目的】本研究は、指導者の自己教育力尺度開発のための構成因子を明らかにすることを目的とした。

【方法】関東甲信越・東海地域の300床以上の病院の指導者1032人を対象として、2018年1月～3月に自記式質問紙による郵送留置法で調査を行った。

【結果】回収数は811部（回収率78.6%）であった。作成した尺度に欠損があるもの、職位をもつ指導者を除く499人を分析対象とした。指導者の平均年齢 $37.9 \pm 7.2$ 年、平均臨床経験年数 $15.0 \pm 6.5$ 年、平均指導者経験年数 $5.8 \pm 5.0$ 年、指導者講習会受講後指導者経験年数 $3.8 \pm 4.3$ 年であった。先行研究に基づき作成した36項目の尺度原案から、項目分析を行った。その結果、22項目となり、 $KMO0.91$ となった。探索的因子分析の結果、16項目4因子（ $r > 0.4$ ）、累積寄与率は57.4%であった。自己教育力尺度（西村ら,1995）との相関係数は0.48、信頼性係数のCronbach  $\alpha$  は、0.91であった。各因子について、第1因子「看護への探求心」、第2因子「実習目標達成への使命感」、第3因子「他者との相互作用の活用」、第4因子「指導能力向上への努力」と命名した。

【考察】最終的に、4因子で構成された16項目を採択した。各因子は、先行研究の内容を反映しており、本尺度は概ね信頼性・妥当性が確保できていると考える。

## I. はじめに

現代の医療背景から看護師の需要が増大し、2017年現在も看護系大学は増加している。このことから、看護基礎教育において、現代学生の特徴を踏まえ、質の高い看護を提供できる看護学生（以下、学生）の育成は重要な課題であり、臨地で指導に当たる臨地実習指導者（以下、指導者）の役割は大きい。この指導者の学生への指導力は、指導者自身の主体的に学習するという姿勢である自己教育力に支えられていると報告されている（松澤ら、2009）。

自己教育力について、中央教育審議会（文部科学省、1983）が、学習する者の主体的・継続的に学ぶ意志・態度・能力として提言して以来、わが国の教育学研究、看護学教育研究において注目され続けている。看護職の自己教育力の育成については、看護師の質の向上を目指すために自己教育力の育成・強化への研修会などを推し進めている（日本看護協会、2003；厚生労働省、2011）。このような背景から、看護職の自己教育力に関する先行研究は増加傾向にある。また、それらの研究のデザインは量的研究が多く、看護師を対象に西村ら（1995）が作成した自己教育力測定尺度が用いられている。この尺度は、内的整合性、信頼性を検証している。しかし、因子分析による全分散の寄与率が低い点や、質問項目にある対象者の学習の方法や研修内容が、時代の変遷に依拠していないなど、課題を残したまま、改善や新たな開発がされることなく、開発から約30年となる現在まで使用され続けている現状がある。また、この尺度は、看護師を対象としたものであり、指導者を対象としたものではないため、指導者の自己教育力の特徴を明らかにできないと考えた。

現在の医療の高度化、高齢社会、在院日数の短縮な

どの実習環境の中で、学生が自ら看護の学びを深めるために、指導者自身も自ら学ぶという自己教育力を培うことが、質の高い実習指導のために重要であると考えられる。さらに、看護学生が、自己教育力が高く自ら学んでいる指導者から、実習指導を受けることは、相互作用により学生自身の学習意欲が高まり、そのことが、自己教育力の向上に繋がり、学生個々の看護に関する学習を深める機会となる。このことから、指導者の自己教育力を測定し、自らの教育力を確認し、学びを深めていくための自己教育力尺度の開発は、重要な課題であると考えられる。

研究者らは、先行研究において、指導者の自己教育力と関連要因を明らかにし、さらに、自己教育力に強い関連を示した要因についてもその特徴を明らかにし、報告している（千葉ら、2016）。さらに、指導者の自己教育力のとらえ方について、指導者にインタビューを実施し、内容分析を行い、指導者の自己教育力を測定できる尺度の原案を作成した（千葉ら、2018）。

そこで本研究では、実習指導者の自己教育力を測定するための実習指導者の自己教育力尺度の開発のために、指導者の自己教育力の構成因子を明らかにすることとした。

## II. 研究目的

看護学臨地実習指導者の自己教育力尺度開発のために、指導者の自己教育力の構成因子を明らかにする。

## III. 用語の定義

### 1. 看護学臨地実習指導者

3年以上の臨床経験をもち、厚生労働省が指定する看護学臨地実習指導者講習会の受講を修了し、看護管理者

より任命され、実習指導にあっている看護師とする。

## 2. 自己教育力

実習指導者として、個人の成長・発展に向けて、主体的、継続的に学習する態度であり、自己を教育する力とする。

## IV. 研究方法

### 1. 調査対象

関東甲信越・東海地域の300床以上の病院で、実習指導者講習会を修了し、看護学生の実習指導にあたる実習指導者とする。

### 2. 調査方法

#### 1) データの収集方法

関東甲信越および東海地域の300床以上の病院、404施設の看護管理者に研究協力依頼文書、研究承諾書、調査用紙を返信用封筒とともに送付し研究協力を依頼した。依頼後、承諾が得られた施設に対し、研究協力依頼書、調査用紙、返信用封筒を施設長に郵送し、配布を依頼した。研究対象者からは、留置法により回収された。

#### 2) 調査内容

##### (1) 対象者の属性

年齢、性別、婚姻状況、子育て経験、職位、看護師経験年数、実習指導経験年数、指導者講習会受講後指導経験年数を調査した。

##### (2) 指導者の自己教育力

研究者らの先行研究(2018)から指導者の自己教育力尺度の原案52項目を抽出した。さらに、実習指導経験者、看護教育経験者、および質的研究・量的研究に精通した複数の看護学研究者、大学院を担当する看護学研究者の看護教育に関わる看護専門職者(以下、看護専門職者)で構成される専門家会議で、内容妥当性について複数の検討を重ね、抽出した36項目を指導者の自己教育力尺度原案として調査した。回答は、「あてはまらない」「かなりあてはまらない」「ややあてはまらない」「ややあてはまる」「かなりあてはまる」「あてはまる」(1～6点)の6件法で得点化した。

##### (3) 基準関連妥当性

外的基準として、西村ら(1995)が、梶田の開発した尺度に修正を加え、看護師を対象に全40項目で構成される自己教育力測定尺度を使用した。Cronbach  $\alpha$  係数0.77であり、信頼性・妥当性は検証されている。なお、本研究にあたり尺度使用の許可を得ている。

#### 3) データの分析方法

##### (1) 内容妥当性の検討

研究者らは、指導者を対象に自己教育力のとらえ方

についてインタビューによる内容分析を実施した。その結果を基に質問項目を作成した。看護専門職者の専門家会議で、質問項目の適切さについて、繰り返し検討を重ねた。

##### (2) 表面妥当性の検討

看護専門職者の専門家会議で質問項目の表現、重複項目や不足項目を検討し修正した。

##### (3) 項目分析と標本妥当性の検討

質問紙の回答に偏りのある項目を排除するため、各項目の記述統計量を確認した。さらに、天井効果と床効果、項目間相関とItem-Total correlation(以下I-T相関)、Kaiser-Meyer-Olkin(以下KMO)の標本妥当性を検討した。

##### (4) 構成概念妥当性の検討

探索的因子分析を最尤法・Promax回転で実施した。項目除外基準は、因子固有値1.0以上、因子負荷量0.4以上とした。

##### (5) 基準関連妥当性の検討

指導者の自己教育力尺度の総合得点と自己教育力尺度(西村ら, 1995)の総合得点の関係性を検討するため、Pearsonの相関係数を算出した。西村ら(1995)の自己教育力尺度は、4下位概念4領域:I領域(成長・発展への志向)、II領域(自己の対象化と統制)、III領域(学習の技能と基盤)、IV領域(自信・プライド・安定性)で構成されており、全40項目各領域10項目の尺度である。「はい」:2点、「いいえ」:1点の2件法で得点化する。自己教育力の得点範囲は、40点～80点で、得点が高いほど自己教育力が高いことを意味する。

##### (6) 信頼性の検討

尺度全体を下位尺度のCronbach  $\alpha$  係数を求めた。

統計解析には、統計解析ソフトSPSSver.24を使用し、有意水準5%とした。

## V. 倫理的配慮

対象病院には調査の主旨を文書にて説明し、看護管理責任者の許可を得た。研究対象者に対し、配布文書にて、研究目的、方法、倫理的配慮について説明し、結果公表に際しての匿名性を保証した。また、データは、本研究の目的以外には使用しないこと、参加・不参加・中止は自由であり、調査に伴う不利益はないこと、調査用紙の提出をもって同意が得られたものとするを説明した。調査用紙は、封をしたうえで投函するよう依頼しプライバシーの保護に努めた。その折、不同意の場合は、投函の義務はなく、白紙での投函も可能であることを伝えた。

本研究は、埼玉医科大学保健医療学部倫理審査委員会の承諾を得て実施した(承認番号153)。なお、研究

者と研究対象者の間に申告すべき利益相反（COI）は存在しない。

## VI. 結果

### 1. 対象者の特性（表 1）

関東甲信越・東海地域の 300 床以上の病院 404 施設を抽出した。そのうち、63 施設（承諾率 15.6%）の看護管理責任者より承諾を受け、承諾人数 1032 人に調査用紙を配布した。

回収数は 811 部（回収率 78.6%）であった。そのうち、職位をもつ指導者を除く 508 人（62.6%）から、作成した尺度の回答に欠損がない 499 人（有効回答率 98.2%）を本研究の解析対象とした。

指導者の平均年齢は 37.9 ± 7.2 歳であった。平均臨床経験年数 15.0 ± 6.5 年、平均指導者経験年数 5.8 ± 5.0 年、指導者講習会受講後指導者経験年数 3.8 ± 4.3 年であった。また、男性 56 人（11.2%）、女性 438 人（87.8%）、

表 1 看護学臨地実習指導者の個人属性

		N=499	
		平均	標準偏差
年齢		37.9	7.2
看護師経験年数		15.0	5.8
臨地実習指導経験年数		5.8	5.0
講習会受講後指導経験年数		3.8	4.3
		人数	%
性別	男性	56	11.2
	女性	438	87.8
	無回答	5	1.0
婚姻状況	既婚	280	56.1
	未婚	200	40.1
	無回答	19	3.8
子育て経験	あり	241	48.3
	なし	231	46.3
	無回答	27	5.4
実習指導体制	専任	99	19.8
	兼任	347	69.5
	無回答	53	10.6
実習指導者講習会受講動機	自ら希望した	94	18.8
	すすめられた	343	68.7
	無回答	62	12.4
学会・研修会の参加	あり	315	63.1
	なし	158	31.7
	無回答	26	5.2
研究・学習活動	あり	113	22.6
	なし	355	71.1
	無回答	31	6.2
最新の専門誌の閲覧・購読	あり	72	14.4
	なし	280	56.1
	無回答	147	29.5

実習指導体制を専任と回答した者は 99 名（19.8%）、兼任と回答した者は 347 名（69.5%）であった。

### 2. 内容妥当性の検討

研究者らの先行研究（2018）から指導者の自己教育力測定尺度の原案 52 項目を抽出した。その後、看護専門職者で構成される専門家会議で、内容妥当性について複数の検討を重ね 36 項目を採択した。

### 3. 表面妥当性の検討

看護学研究者に対し、プレテストを実施し、分かりにくい表現や文章を修正し、最終的に 36 項目の尺度原案を作成した。

### 4. 項目分析と標本妥当性の検討

回答を得た 36 項目に対し、項目の平均値と標準偏差を算出し、度数分布を確認した。天井効果・床効果はなかった。項目間相関が 0.7 を超えた項目、および I-T 相関が 0.7 を超えた項目と 0.3 以下の項目、14 項目を除外したところ 22 項目となった。KMO の標本妥当性の基準値は 0.91 であった。

### 5. 構成概念妥当性の検討（表 2）

22 項目について、最尤法・プロマックス回転で探索的因子分析を行った。回転前固有値 1.0 以上の 4 因子を抽出した。負荷量 0.4 以上の項目決定の基準として、分析を繰り返し、負荷量が 0.4 未満のものを削除し、最終的に、尺度の項目数は、全 16 項目となった。16 項目での回転前累積固有値寄与率は、57.4%であり、4 因子が抽出された。

### 6. 基準関連妥当性の検討

自己教育力尺度（西村ら、1995）と本研究で作成した指導者の自己教育力尺度の総合得点との総合得点の相関係数は、0.48 であった。

### 7. 信頼性の検討

尺度全体の Cronbach  $\alpha$  係数は、0.91 であった。各因子においては、第 1 因子は 0.83、第 2 因子は 0.82、第 3 因子は 0.77、第 4 因子は 0.80 であった。

### 8. 構成因子の命名

第 1 因子は、「実習指導は楽しい」、「学生に大切にしている看護を伝えることは楽しい」、「実習指導の学習を通して自己のキャリアアップを考えている」、「実施した看護を振り返り看護の専門性を探求し続けたい」、「学生のロールモデルになりたい」の 5 項目から【看護への探求心】と命名した。

表2 看護学臨地実習指導者の自己教育力の構成因子

N=499

質問項目	抽出因子				
	1因子	2因子	3因子	4因子	共通性
<b>第1因子：看護への探求心</b>					
実習指導は楽しい	0.85	0.11	-0.16	-0.07	0.62
学生に大切にしている看護を伝えることは楽しい	0.82	0.09	-0.08	-0.04	0.66
実習指導の学習を通して自己のキャリアアップを考えている	0.69	-0.20	-0.09	0.26	0.42
実施した看護を振り返り看護の専門性を探求し続けたい	0.56	-0.13	0.18	0.16	0.48
学生のロールモデルになりたい	0.44	-0.07	0.34	0.08	0.49
<b>第2因子：実習目標達成への使命感</b>					
実習指導のために実習目標を意識しながら指導をしている	-0.04	0.84	-0.03	0.01	0.51
指導者としてやるべきことは責任をもってやっている	-0.06	0.79	-0.02	0.07	0.67
実習指導のために学生を理解しようとしている	0.00	0.60	0.00	0.19	0.60
実習目標の達成に向けた実習指導をしたい	0.29	0.46	0.16	-0.16	0.52
<b>第3因子：他者との相互作用の活用</b>					
指導者同士で実習指導方法を共有している	-0.20	-0.01	0.84	0.04	0.55
実習指導について他者に相談し助言をもらっている	-0.10	-0.06	0.71	0.10	0.45
もっと自分の看護実践能力を高めたい	0.26	0.05	0.51	-0.05	0.51
学生や他者から自分の実習指導を認められることは嬉しい	0.26	0.13	0.49	-0.15	0.50
<b>第4因子：指導能力向上への努力</b>					
実習指導の知識や技術を得るために努力している	0.01	0.04	0.00	0.92	0.89
実習指導に自信がもてるように学習している	0.10	0.07	0.09	0.57	0.52
実習指導の指導方法について学んでいる	0.05	-0.07	0.22	0.51	0.61
固有値	6.72	1.56	1.19	1.06	
因子寄与率 (%)	37.62	8.03	6.23	5.56	
累積因子寄与率 (%)	37.62	45.65	51.88	57.44	
信頼性係数 (Cronbach $\alpha$ 係数)	全体 $\alpha=0.91$	0.83	0.82	0.77	0.80

最尤法 プロマックス法

第2因子は、「実習指導のために実習目標を意識しながら指導をしている」、「指導者としてやるべきことは責任をもってやっている」、「実習指導のために学生を理解しようとしている」、「実習目標の達成に向けた実習指導をしたい」の4項目から【実習目標達成への使命感】と命名した。

第3因子は、「指導者同士で実習指導方法を共有している」、「実習指導について他者に相談し助言をもらっている」、「もっと自分の看護実践能力を高めたい」、「学生や他者から自分の実習指導を認められることは嬉しい」の4項目から【他者との相互作用の活用】と命名した。

第4因子は、「実習指導の知識や技術を得るために努力している」、「実習指導に自信がもてるように学習している」、「実習指導の指導方法について学んでいる」の3項目から【指導能力向上への努力】と命名した。

## VII. 考察

調査対象の指導者は、平均年齢は 37.9 ± 7.2 歳、平

均臨床経験年数 15.0 ± 6.5 年、平均指導者経験年数 5.8 ± 5.0 年、指導者講習会受講後指導者経験年数 3.8 ± 4.3 年であり、先行研究(千葉ら, 2016)と同様の結果であった。厚生労働省(2008)は、実習施設として、実習指導者講習会を受けた指導者を病棟に2人以上配置することを推奨している。このことから、本研究対象者は、300床以上の病院で働く実習指導者講習会を修了した指導者であり、厚生労働省(2008)が示すある一定水準の看護職員の教育体制をもつ施設で、学生の実習教育に対する指導能力をもつ集団であることが推察できる。

### 1. 看護学臨地実習指導者の自己教育力の構成因子

西村ら(1995)は、自己教育力を、梶田(1985)の自己教育力の概念を基盤に、自分自身で学び、成長・発展してゆける力として定義づけている。そして、これらの定義を基に、梶田(1985)の開発した自己教育力尺度に修正を加え、看護師を対象に「自己教育力尺度」を開発した。この尺度は、4下位概念4領域：Ⅰ領域(成長・発展への志向)、Ⅱ領域(自己の対象化と統制)、Ⅲ領域

(学習の技能と基盤), IV領域(自信・プライド・安定性)で構成されている。

西村ら(1995)の尺度と本研究で明らかになった構成因子を比較すると,以下のことが明らかになった。

西村ら(1995)の自己教育力測定尺度におけるI領域は、「自己教育を培っていく上での基本的な志向性」(目標の感覚と意識,達成・向上の意欲)である。さらに,II領域は,I領域の成長・発展への志向と関連し,一步一步,前進させていく力(自己の認識と評価の力,自己統制の力)を測定するものである。

このI領域とII領域は,本研究の下位概念である【実習目標達成への使命感】と【指導能力向上への努力】にあたる。本研究の指導者の自己教育力尺度の構成因子である,【実習目標達成への使命感】は,指導者が,学生を理解しながら実習目標の達成に向けて,責任をもって指導するための意欲であり,西村ら(1995)のI領域,自己教育を培っていく上での基本的な志向性である,目標の感覚と意識,達成・向上の意欲を示すものといえる。さらに,本研究の指導者の自己教育力尺度の構成因子である,【指導能力向上への努力】は,指導のために,実習指導の知識や技術,指導方法を学ぼうと努力する姿勢であり,西村ら(1995)のII領域の自己の認識と評価の力,自己統制の力を示すものといえる。

これらのことから,本研究の構成因子の【実習目標達成への使命感】,【指導能力向上への努力】は,西村ら(1995)のI領域とII領域を示した内容と類似したものといえる。

次に,西村ら(1995)の尺度のIII領域である,「基礎学力と学習の術としての学び方」(学習の技能と基盤)とIV領域の「自身の前進を可能にする心理的基盤」(自信・プライド・安定性)は,本研究の構成因子である【看護への探求心】にあたる。本研究の指導者の自己教育力尺度の構成因子である,【看護への探求心】は,看護の専門的な知識・技術を探求し,習得することで,看護の技能に発展するといわれている(茂野,2018)。そのことが,指導者の看護への学びやプライドとなり,看護の専門性の明確化に繋がるものと考えられる。それは,看護を探求した者が感じる自信や力となると考える。これらのことから,本研究の構成因子の【看護への探求心】にあたる内容であると考えられる。一方で,指導者の自己教育力の構成因子として,【看護への探求心】が,抽出できたことは,本研究の自己教育力尺度の特徴的なものといえる。富田ら(2012)は,指導者の看護観が明確であり,学生に語り伝えられることは,実習指導者の指導能力の重要な基盤であることを報告している。その指導者の看護観が,学生に看護を伝える基盤となり,学生の看護観の明確化に繋がる。そのためにも,指導者の自己教育力の一つとして【看護への探求心】は,指導者とし

て重要なものとする。

また,本研究の指導者の自己教育力の構成因子である,【他者との相互作用の活用】については,西村ら(1995)の自己教育力尺度には,見当たらない本研究の特徴的な因子であった。

指導者は,実習指導に対し,さらに他の人に相談したり,助言を受けたりするなど,他者からの力をかりて,自己教育力を高め,学生の学びのために,指導方法を工夫しながら,実習指導をおこなっている。このことから,指導者の自己教育力の構成因子として,【他者との相互作用の活用】が抽出されたと考える。

以上の内容から,本研究で作成した実習指導者の自己教育力尺度は,千葉ら(2018)が作成した指導者の自己教育力尺度の原案や,西村ら(1995)の自己教育力尺度を反映したものであり,実習指導者の自己教育力の特徴が測れる尺度であると考えられる。

## 2. 妥当性の検討

本研究対象者の指導者の自己教育力において,基準関連妥当性では,看護師を対象とした自己教育力尺度(西村ら,1995)の総合得点の相関係数は,0.48で中程度の相関があり,妥当な結果であると考えられる。また,本尺度のKMOの標本妥当性は,0.9を超えており,探索的因子分析の結果,構成概念妥当性が検証されたといえる。

さらに,表面妥当性では,研究者らの指導者へのインタビューから看護学研究者で尺度の原案を作成し,指導者の自己教育力を測れるか,検討を繰り返し重ねている。このことから,指導者の自己教育力を測定できる尺度であると考えられる。

今後は,確証的因子分析を行い,適合度を検証し精度を高めていく必要がある。

## 3. 信頼性の検討

指導者の自己教育力のCronbach  $\alpha$ 係数は,尺度全体および第1因子,第2因子,第4因子は,0.8~0.9であり高かった。第3因子についても,0.7以上で木原ら(2016)が示した基準値を満たしており,これら全てに高い数値で信頼性が検証されたと考えられる。

## VIII. 今後の課題

本尺度は,おおむね信頼性・妥当性が確保できていると考えられるが,今後,テスト-再テスト法や確証的因子分析を用いて検証し,看護学臨地実習指導者の自己教育力を測定するための尺度として精度を上げていく必要があると考えられる。

## IX. 結論

1. 指導者の自己教育力の測定項目は 16 項目で、その構成因子として、第 1 因子【看護への探求心】、第 2 因子【実習目標達成への使命感】、第 3 因子【他者との相互作用の活用】、第 4 因子【指導能力向上への努力】が抽出された。
2. 抽出した 4 因子は、KMO 標本妥当性 0.91、累積寄与率 57.4%、Cronbach  $\alpha$  0.7 ~ 0.9 であり、おおむね信頼性は確保されたと考える。
3. 指導者の自己教育力の 4 因子は、既存の尺度（西村ら, 1995）の内容を網羅しながらも、本尺度では、学生を教育する立場にある指導者として、【看護への探求心】、【他者との相互作用の活用】という特徴的な構成因子が抽出された。

## 謝 辞

本研究を実施するにあたり、本研究にご協力いただきました病院の看護管理責任者の方々、臨地実習指導者の皆様に心より感謝申し上げます。本研究は、2017 年度埼玉医科大学保健医療学部プロジェクト研究の研究助成を受けて実施した研究の一部である。

## 文 献

- 千葉今日子, 富田幸江, 横山ひろみ (2018) : 看護学臨地実習指導者の自己教育力のとらえ方, 埼玉医科大学看護学科紀要, **11** (1), 33-40.
- 千葉今日子, 富田幸江 (2016) : 看護学臨地実習指導者の自

己教育力とその関連要因, 埼玉医科大学看護学科紀要, **9** (1), 19-29.

- 梶田叡一 (1985) : 自己教育への教育, 明治図書, 東京.
- 木原雅子, 加治正行, 木原正博 (2016) : 医学的測定尺度の理論と応用 (第 1 版), メディカルサイエンスインターナショナル, 東京.
- 厚生労働省 (2008) : 看護師等養成所の運営に関する指導要領. [https://www.mhlw.go.jp/web/t\\_doc?dataId=00ta6785&dataType=1&pageNo=1.2014.10.5](https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00ta6785&dataType=1&pageNo=1.2014.10.5).
- 厚生労働省 (2011) : 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書. <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000013l0qatt/2r98520000013l4m.pdf>. 2014.9.28.
- 日本看護協会 (2003) : 継続教育の基準 ver.2 活用のためのガイド, <https://www.nurse.or.jp/nursing/education/keizoku/pdf/ver2-guide-2-all-0805.pdf>. 2014.9.28.
- 松澤由香里, 休波茂子 (2009) : 臨地実習指導者の教師効力に関連する要因の検討, 日本看護学教育学会誌, **18** (3), 35-45.
- 文部科学省 (1983) : 中央教育審議会教育内容等小委員会の審議経過報告.
- 西村千代子, 奥野茂代, 小林洋子 (1995) : 看護婦の自己教育力 - 自己教育力測定尺度の検討 -, 日本赤十字社幹部看護婦養成所紀要, **11**, 22-39.
- 富田幸江, 仙田志津代 (2012) : 看護基礎教育における実習指導のエッセンスを伝える実習指導者講習会 (その 1) 実習指導に望まれる指導者としての力量, 看護教育, **53** (3), 212-218.
- 茂野香おる (2018) : 系統看護学講座 専門分野 I 基礎看護学 [2] 基礎看護技術 I, 医学書院, 東京.